

続・僕の図書館戦争（β版）

中 相作



芭蕉さんはまた行く

「一年間のご無沙汰でございまして」

「早いもんですね実際」

「去年の秋に出た本誌第二十三号のつづきゆうことになるんですけど」

「わざわざつづきやる必要もないのとちがいますか」

「君それなにをゆうてるんですか」

「どないしました」

「僕らの漫才ほど伊賀地域において必要とされてるものはほかにないんですから」

「どのへんが必要とされてますねん」

「必要のないものに対してそんなものは必要ないんだと指摘してやる漫才として必要とされてるんです」

「今年の漫才もなんやまたややこしそうですな」

「去年の漫才でも指摘してやったんですけど」

「なんの話題でした」

「伊賀の蔵びらき」

「君まだその話つづける気ですか」

「芭蕉さんは行かずにたくさんのおほさんが行った官民合同事業の『生誕三六〇年芭蕉さんがゆく秘蔵のくに伊賀の蔵びらき』にかんして指摘をいたしました」

「たしかにあれこれゆうてました」

「二〇〇四年の事業でしたけど」

「ちようど十年前になります」

「あの事業をめぐって『伊賀百筆』第二十三号に僕が残した名言を君おぼえてませんか」

「そうゆうのはとくになかったと思いますけど」

「伊賀地域住民の魂を震撼させた名言です」

「どんなでした」

「虎は死して皮を残し伊賀の蔵びらきは大失敗に終わってあほを残す」

「そのどきが名言ですねん」

「あの名言は地域社会の真実を無慈悲なまでにえぐり出していたんです」

「いったいどんな真実ですねん」

「伊賀市といいますが旧上野市といえますか要するにあそこあたり」

「なんぞ問題でもあるんですか」

「十年に一度のことですけど」

「大雪でも降りますか」

「西暦の下一桁が四になる年にかぎってわいて出るらしいんです」

「なにがわいて出ますねん」

「ゆうたら害虫みたいなものでしょうね」

「害虫て君」

「鳴き声もわかってますから」

「なんちゆうて鳴きますねん」

「バショーサンガーバショーサンガーバショーサンガーバショーサンガー」

「君もかししたら『芭蕉さんが』ゆうのんくり返してるだけなんちがいますか」

「バショーサンガーバショーサンガーゆうて鳴きながら十年に一度わいて出る害虫がいるらしいんです」

「そんな話は聞いたことありませんけど」

「伊賀市には芭蕉が生まれた年を起点として十年単位で記念事業を実施する風習が残ってるみたいでして」

「たしかに十年前には『生誕三六〇年芭蕉さんがゆく秘蔵のくに伊賀の蔵びらき』がありましたね」

「あの血税三億円をどぶに捨てて目もあてられない大失敗に終わった伊賀の蔵びらき事業の関係者は税金つかうだけつこたらさつさと逃げてしまいましたけど」

「逃げてしもたゆうたら人間きが悪いですがな」

「けつまくつてとんずらかましてしまいましたけど」

「表現としてはより悪い方向に進んでませんか」

「逃げてしもただけで絶滅してしまったわけではないですからね」

「なんで絶滅せなあきませんねん」

「伊賀の蔵びらきの残党のみなさんは地域社会に生息して虎視眈々と次の機会をうかがっていたわけです」

「豊臣の残党みたいないいかたですけど」

「名張市においてはまちなか再生事業で暗躍して事業の大失敗に一役買ってくれましたし」

「その話はもう聞きあきました」

「乱歩蔵びらきの会という残党の一回はいまも名張市で活動してくれてますし」

「好きなように活動してもらったらよろしかな」

「ある意味勇気ある活動ですけどね」

「乱歩蔵びらきの会のことですか」

「蔵びらきという言葉を団体名に使用するのは手前どもは『生誕三六〇年芭蕉さんがゆく秘蔵のくに伊賀の蔵びらき』の残党でございますのでいくら石を投げられても文句はいりませんゆう看板を堂々と掲げて歩いてるようなもんですからたしかに勇気はあるんです」

「君ほんましまいに叱られますから」

「ただまあ伊賀の蔵びらきのことはいまや完全に忘れられてますからその点が救いといえれば救いでして」

「べつに救われる必要はないと思いますけど」

「それで伊賀の蔵びらきのことがすっかり忘れ去られてからまた西暦の下一桁が四になる年を迎えました」

「芭蕉の生誕記念事業の年が巡ってきました」

「そうゆう年やからゆうてなにかせなあかんわけではないんですけど」

「でも記念事業をやったらあかんゆうことでもないですからね」

「そこなんです」

「どこです」

「まさにその点なんです」

「せやからどの点です」

「記念事業が必要なのか必要でないのかという問題に客観的で正当な判断をくだすことが地域社会から僕らの漫才に求められてるわけなんです」

「そんなこと絶対にはずすと思いますけど」

「つまり僕らには伊賀市民の負託にこたえてこの漫才をやりとげねばならないという責務があるんです」

「伊賀市民の誰ひとりとしてそんなことは望んでません」

「ただし僕は伊賀市民ではなくて名張市民ですから」

「それやったらおとなしいしてたらよろしうがな」

「伊賀の蔵びらき事業の残党が十年後の今年どれだけ伊賀市にわいて出てバショサンガーバショサンガーゆうて鳴いたのかは正確には把握できません」

「そんなこと把握してなにをします」

「ですから把握しないまままで漫才を進めたいと思います」

「なんや話が無茶苦茶ですけど」

「けどしよせんなんにも考えんとバショサンガーバショサンガーゆうて喜んでるだけという点では誰も彼も同じ穴のむじなです」

「なんにも考えんと好きなことゆうて喜んでるのは君のほうやないですか」

芭蕉さんは行けない

「伊賀市ではじつは去年からもめてまして」

「君そういう話がほんまに好きですね」

「去年の九月議会で伊賀市がある提案をしたんです」

「芭蕉生誕三百七十年記念事業の提案ですか」

「さつぽろ雪まつりに芭蕉の雪像を設置して伊賀市が

芭蕉生誕地であることを広く全国にPRしたい」

「そういえば新聞でも報じられてました」

「そのための予算八百一万円を組み込んだ一般会計補

正予算案が九月議会に上程されたんですけど」

「たしか市議会が待ったをかけたゆう話でしたね」

「雪まつり関連の予算は執行を凍結するという付帯決

議案が賛成多数で可決されました」

「なんで凍結ゆうことになったんですか」

「そもそも雪まつりだけに凍結がつきものなんです」

「大喜利やってるんじゃないんですから」

「伊賀タウン情報Y.O.Uのウェブニュースによります

と『田山宏弘議員が「市民を巻き込んだ議論の中から

発生したものとは言い難く、費用対効果などの説明も

不十分と指摘せざるを得ない」と説明。採決は定数24

人のうち、議長を除く19人が賛成、4人が反対という

結果だった』ゆうよなことでした」

「ほぼ八割の議員が凍結に賛成ゆうことですか」

「議論がとか説明がとかいろいろ意見はあったみたい

ですけど伊賀市議会の本音は結局ひとつですから」

「本音でどんなですねん」

「おんどれやあほんだら議会なめとつたらえらい目に

遭わずぞらおんどれやあほんだらおんどれや」

「そんながらの悪い議会がどこにありますねん」

「そのあと十月の全員協議会で凍結を解除するかどう

かが話し合われたんですけど最終的に解除しないゆう

ことが決まりました」

「さつぽろ雪まつりに芭蕉の雪像は設置しないと」

「そうゆう結末になつてしもたわけなんですけどこれ

最初からおかしな話ではあったんですね」

「どのへんがおかしかったんですか」

「芭蕉は北海道へ行きたいと思いつながらその夢を実現

することができなかったという話が前提でした」

「ほんまなんですかそれ」

「そう。まさにそうゆう話なんです」

「どうゆうことですねん」

「君程度の人間でもほんまなんですとかそれと素朴な疑

問を抱いてしまうほど眉唾もの話なんです」

「君程度の人間ゆうことはないやろがな」

「伊賀タウン情報YOUのウェブニュースによりますと去年の九月議会において『市は芭蕉が自らの人生を振り返った『幻住庵記』に、津軽海峡を渡って北海道に赴きたかったが、同行した弟子から病弱を理由に引き止められたことが綴られており、「翁の思いをかなえるため」と企画したという』ゆうよなことでした」

「それやつたらちゃんと根拠のある話ですがな」

「けど芭蕉ゆうのは江戸時代の人ですからね」

「そんなこと誰かて知ってます」

「つまり芭蕉が生きていた時代には上野発の夜行列車もなければ青函連絡船もなかったんです」

「あるわけがないがな」

「凍えそうな鷗を見つめて泣いている女性が津軽海峡近辺にいた可能性は一概に否定できませんけど」

「いったいなんの話をしてるんですか」

「かりに北海道へ行ってみたとしても函館の女や小樽のひとが待つてくれるわけでもなし」

「あたりまえですがな」

「摩周湖は霧に抱かれて静かに眠ってるだけ」

「さっきから歌の文句ばかりですけど」

「襟裳の春はなにもない春です」

「そんな森進一さんの歌そのままやないですか」

「そんな時代に芭蕉が北海道へ行きたがってたゆうような話を君はすんなり信じられるんですか」

「けど『幻住庵記』に書いてあるゆうことですから」

「せやからそれがおかしい」

「なにがおかしいんですか」

「『幻住庵記』にそんなことが書いてあったという記憶が僕にはまったくなかったんです」

「忘れてしもてたんとちがいますか」

「僕もそう思て家にある新潮日本古典集成の『芭蕉文集』という本を開いて確認してみたんですけど」

「どないでした」

「北海道のことなんかまったく出てこないんです」

「それは妙ですね」

「こらおかしいなゆうので専門家にお聞きしてみることにいたしました」

「どなたにお聞きしました」

「この手の話は伊賀市の芭蕉翁記念館に電話一本入れたら懇切丁寧に教えていただけますから」

「あの上野公園のなかにある記念館ですね」

「そうすると信じられないような驚くべき事実が浮かびあがってきたんです」

「そんな君たいそうな」

『幻住庵記』は芭蕉が『おくのほそ道』の旅を終えてから書いた短い文章でして」

「つまり晩年の作品ですか」

「芭蕉四十七歳のときの作品ですから死去の四年前ゆうことになりましたね」

「そしたら『おくのほそ道』の旅が終わって伊賀へ帰ったところですか」

「いったん帰郷はしたんですけどそのあと大津の山にあった幻住庵ゆうとこに四か月ほど滞在しましてね」

「幻住庵で書いたから『幻住庵記』ですか」

「疑いながら書いたら疑心暗鬼ですけど」

「しょうもないこといわんでよろしねん」

「記憶だけに頼って書くのが丸暗記ゆうやつでして」

「もうええゆうのに」

「それでその『幻住庵記』には一般に流布してるもの以外にバリエーションがあったらしいんです」

「バリエーションといいますと」

「異稿といいますか異文といいますか」

「なんのことですもん」

「一般に流布してるものとは微妙にちがうところがある文章のことです」

「なんでそんなものがありますもん」

「たとえば完成した文章とその下書きという二種類の原稿があつてその下書きが世の中に出た場合」

「下書きがバリエーションゆうことになるわけですか」

『幻住庵記』にも米沢家本と呼ばれるバリエーションがあつてそこには北海道が出てきてるんです」

「一般に流布してる『幻住庵記』には北海道のことは書かれてないけどその米沢家本の『幻住庵記』には北海道のことが書かれていると」

「芭蕉翁記念館に電話を入れてそうゆうことを懇切丁寧に教えていただきました」

「そしたらたとえばバリエーションでも『幻住庵記』に芭蕉が北海道へ行きたいと思つていたと書かれてるんやつたらべつに問題はないのどちがいますか」

「ところがそう簡単なものやないんです」

「どうゆうことですか」

「米沢家本は小学館から出た日本古典文学全集の『松尾芭蕉集』に収録されてまして芭蕉翁記念館からはそのコピーもファクスしていただいたんですけど」

「なにか問題があつたんですか」

「そのコピーから信じられないような驚くべき事実が浮かびあがつてきたんです」

「君さっきからそればかりですがな」

芭蕉さん立ち往生

「たしかに北海道は出てくるんですけど」

『幻住庵記』の米沢家本の話ですね」

「もちろん当時のことですから北海道ではなくて蝦夷という言葉が使用されてます」

「北海道という地名はまだありませんでした」

『松尾芭蕉集』収録の米沢家本から引用いたしますと『猶^{なほ}とふ啼^{なく}そとの浜^{なは}辺より、糸^{いと}ぞが千^ちしまをみやらむまでと、しきりにおもひ立^{たち}侍^{はべ}るを、同行^{どうぎやう}曾良^{そうら}何がしといふもの、多病^{たへい}いぶかしなど袖^{そで}をひかゆるに心たゆみて、きさがたといふ処^{ところ}より越^こ路^ろにおもむく』

「さっぱり意味がわかりませんけど」

「芭蕉は『おくのほそ道』の旅で松島から湯殿山へ行つて『語^{こと}られぬ湯殿にぬらす袂^{たもと}かな』とか詠んだあとなお善^う知^と鳥という鳥が鳴く外ヶ浜から蝦夷の千島が見えるところまで行きたいとしきりに思ったんですけど同行していた曾良という者があなたは病気がちだから不安ですと袖を引いてとめたので心が弱^{よわ}り象潟^{さかた}というところから北陸へ行きましたゆうなこととして」

「蝦夷が千島というのが出てきますけど」

「北海道のたくさん島の島という意味ですね」

「芭蕉はそれが見たかったわけですか」

「津軽半島の外ヶ浜まで行きたいものだなあと」

「その外ヶ浜から北海道のたくさん島の島を眺めてみたもののだなあと」

「外ヶ浜はお能の世界では善知鳥という鳥が住んでることになってましてね」

「それで善知鳥が鳴く外ヶ浜ゆうわけですか」

「もちろん凍えそうな鷗^うが鳴いていた可能性も一概には否定できないと思いますけど」

「歌の話はよろしねん」

「ところが『おくのほそ道』の旅に随行していた曾良という門人にストップをかけられてまして」

「あなたは病気がちなんですから外ヶ浜へ行くのはやめときましよう」と

「ですから象潟まで行つて『象潟や雨に西施^しが合歡^{がくわん}の花』とか詠んだあと日本海沿いに引き返しました」

「西の能登半島のほうへ進んだゆうことですな」

『『荒海や佐渡に横たふ天の河』とか詠みながら『おくのほそ道』の旅がつづいたわけなんですけど君」

「どないしました」

「芭蕉も思わず古池に飛び込んでしまうほどの信じられないような驚くべき事実が判明したんです」

「またそれですか」

「これが驚かずにいられますか」

「いったいなにに驚いてますねん」

『幻住庵記』の米沢家本には芭蕉が北海道へ行きたがっていたとはただのひとことも書かれていなかったんです」

「そうゆうたらそうですね」

「芭蕉はただ北海道のたくさんさんの島が見えるところまで行きたかっただけで」

「津軽半島の外ヶ浜まで行きたいと思ったとは書いてありましたけど北海道に渡りたいとは書かれてませんでした」

「なにしろ上野発の夜行列車もなければ青函連絡船もなかった時代です」

「その話はもうよろしやろ」

「にもかかわらず伊賀市は芭蕉が北海道へ行きたがっていたからという理由でさつぽろ雪まつりに芭蕉の雪像を設置するための予算案を計上したんです」

「ちよっとおかしな話ですね」

「つまりその予算案には芭蕉も思わず旅に病んで夢が枯野をかけめぐり犬は喜び庭かけまわるほどの恐るべき陰謀が秘められていたわけなんです」

「君そんなばっかりですがな」

「ここで念のために確認しておきますと芭蕉が北海道へ行きたがっていたというのは大うそです」

「大うそゆうたら語弊がありますけど」

「つまり虚偽の情報なわけです」

「そしたら伊賀市は虚偽の情報を根拠にさつぽろ雪まつり関連の予算案を組んだわけですか」

「水面下で悪辣な陰謀をめぐらしてでも芭蕉の雪像を登場させたかったゆうことでしょうね」

「けどふつうそこまでしませんやろ」

「たしかにちよっと信じられない話ではあるんです」

「どのへんが信じられないんですか」

「まず誰も疑問を抱いていないという点ですね」

「疑問といいますと」

「芭蕉が北海道へ行きたがっていたという話を聞かされた人はたいいていほんまかいなと思うはずです」

「江戸時代の話ですから」

「芭蕉は赤穂浪士が討ち入りしたころにはもう死んでしもてたぐらい昔の人ですから」

「赤穂浪士はとくに関係ないと思いますけど」

「だというのに君程度の人間でも抱いたさうゆう疑問を関係者の誰ひとりとして抱いた形跡がないんです」

「君程度の人間ゆうのはやめなさいゆうてますがな」

「少なくとも十年に一度バショーサンガーバショーサンガーゆうてわいて出てくるほどの伊賀市民のかたなのであればですね」

「そうゆういいかたはまずいのとちがいますか」

「当然疑問を抱いて家に帰ってから『幻住庵記』の北海道に坎する記述を確認するはずなんです」

「それはそうでしょうね」

「なにしろ十年に一度バショーサンガーバショーサンガーゆうてわいて出てくるほどの人なんですから」

「それはもうええねん」

「ご自宅に『幻住庵記』が収録された本の一冊や二冊はご所蔵のはずですし」

「そんなことわかりませんがな」

「かりにご所蔵でない場合でも芭蕉翁記念館に電話を入れたら疑問はすぐに氷解いたします」

「記念館には専門家がいらっしやいますから」

「ところが実際には芭蕉が北海道へ行きたがっていたと聞かされてへえそうでんのかで終わってるんです」

「そんな感じがしないでもないですね」

「ですから十年に一度バショーサンガーバショーサンガーゆうてわいて出てきてるゆうてもですな」

「バショーサンガーはもうやめませんか」

「じつはみなさん芭蕉のことをろくにご存じないのやないかという気がしてきました」

「推測だけでものゆうたらあきませんかな」

「というよりこうなると芭蕉がどうこうゆう以前に一般的な常識の有無が問題になる気もいたしますけど」

「そこまでゆうことないのとちがいますか」

「でも『幻住庵記』の本文を確認しようとした関係者がひとりもいなかったとしか思えないんです」

「それかてただの推測ですがな」

「ですからそのへんの事実関係がどうであつたのか伊賀市議会あたりで厳しく追及していただいたほうがいいのかもしれないけどそんなことはとても無理でしょうしね」

「無理と決めつけたらあきません」

「けどこの問題を追及しようと思つたらどうしても教養と見識が必要になりますから」

「君そんなこといいますけど伊賀市議会にも教養と見識を兼ね備えた先生はいらっしやいますやろ」

「いや伊賀市議会でそんな先生を探すゆうのは君」

「なんですなねん」

「北海道でアフリカ象を探すようなもんですがな」
「なんでアフリカ象が出てきますねん」

芭蕉さんいつまた帰る

「なんともおかしな話でしてね」

「たしかにかなり変です」

「表面上の事実から判断したら伊賀市が大うそをついてたことにまちがいはありません」

「大うそと表現していいかどうかはともかく『幻住庵記』には芭蕉が北海道へ行きたいと思っていたというようなことはいっさい書かれていませんでした」

「ところが伊賀市は『幻住庵記』にそう書いてあるという虚偽を申し立てて市民を瞞着したわけです」

「そこまで悪辣な陰謀をめぐらしてでもさっぽろ雪まつりに芭蕉の像を設置したかったゆうことですけど」

「それほんまなんですかね」

「ほんまもなにも君がゆうてたことですがな」

「けど『幻住庵記』の米沢家本に北海道が出てくるという事実を目をつけるのはふつうの人間にはとてもしかないことですから」

「それなりの知識が必要ですからね」

「しかも米沢家本の記述にもとづきながら芭蕉が北海道へ行きたがっていたという虚偽の事実を捏造するような手の込んだ小細工まで弄してるんです」

「その虚偽の事実が予算案の根拠になってました」

「そこまでの芸当が伊賀市役所のみなさんのおつむで可能かどうかゆうことになりますと」

「君またそんなことゆうてますけど」

「たぶん死んでも不可能でしょう」

「またそうやって決めつけてますけど」

「そしたらこの一連の悪辣な陰謀はそもそも誰によって仕組まれたのかと思ひ悩んでいたある日のこと」

「なにがありました」

「伊賀市議会の議事録から芭蕉も思わずふるさどで臍の緒に泣いてしまうほどの信じられないような驚くべき事実が浮かびあがってきたんです」

「きようはよう浮かびあがってくる日なんです」

「昨年九月十八日に開会された予算常任委員会においてある委員から質問が出されました」

「さっぽろ雪まつりにかんする質問ですか」

「それに対して『そもそもの発端は、これは市民の方からの御提案がございました』という市長答弁があったんです」

「もともと市民の提案やったんですか」

「でもそれならそれでまた芭蕉が思わず鳥や魚といったしよに泣いてしまうほどの信じられないような」

「驚くべき事実が浮かびあがってきたわけですね」

「事実というかある疑問が浮かんできくるわけです」

「どんな疑問ですもん」

「裏は取らんかったんかという疑問です」

「といいますと」

「なんらかの情報が寄せられた場合その真偽を確認するのが裏を取るゆうことなんですけど」

「そしたらこの場合はなにを確認しますもん」

「その市民からの提案にはおそらく米沢家本『幻住庵記』の情報が含まれていたはずですよ」

「提案の根拠になつてた文章ですから」

「つまり伊賀市は米沢家本に実際に目を通して提案の根拠を確認しなければならなかったんです」

「確認したら芭蕉が北海道へ行きたがっていたとは書かれていないという事実が判明しますけど」

「そうした事実を知りながらあえて大うそをついたのかそれとも米沢家本を確認する労を取ることもなく市民提案を鵜呑みにして結果的に大うそをついたのか」

「それはぜひとも追及するべきことやないんですか」

「けど伊賀市議会は北海道のアフリカ象ですから」

「そんなん君が勝手にゆうてるだけのことですがな」

「ばおーッ。ばおーッ」

「なにも象の鳴き真似することないと思いますけど」

「でもまあ伊賀市議会の先生がたがおんどれやあほんだら議会なめとつたらえらい目に遭わすぞこらおんどれやあほんだらおんどれやと待ったをかけてくれたおかげでなんとかことなきを得たわけですから」

「そうゆうことになりますか」

「そんなもんさつぽろ雪まつりに芭蕉の像が登場してその前で伊賀市の人間が芭蕉さんの夢は北海道へ来ることでございましたとか説明したりしたら君」

「伊賀市はちよつと恥ずかしいことになつてたかもしれせんね」

「話そのものはかなり面白かつたんですけど」

「さつぽろ雪まつりに参加することですか」

「たとえば十年前の伊賀の蔵びらきではですね」

「またその話ですか」

「本誌第二十三号の漫才でも指摘したとおりちまちましたご町内イベントを寄せ集めて関係者がひとりよがりには舞いあがつただけやったんですけど今回の話はそうゆうのとは明らかに一線を画してますからね」

「北海道で開催される著名なイベントに参加するゆうだけでも過去に例のない話です」

「つまり『幻住庵記』は必要なかったんです」

「どうゆうことですねん」

「生誕三百七十年芭蕉さんが行くさつぽろ雪まつり。ただそれだけのことでよかったんです」

「その場合なにが根拠になるんですか」

「さつぽろ雪まつりに参加することは伊賀市のPRになりますゆうだけで事業の立派な根拠ですがな」

「費用対効果の問題は」

「実際にやってみないことには具体的な効果なんか誰にもわかりません」

「そしたら『幻住庵記』がどうのこうのと理由づける必要はなかったわけですか」

「そんな小細工はまったく必要ありませんでした」

「いわれてみたらそんな気もしてきましたけど」

「芭蕉さんと北海道はなんの関係ありませんけどええPRになると判断いたしましたので伊賀市の大切な税金をつかって芭蕉さんに雪まつり行ってもらいまーすゆうて市議会や一般市民に説明を尽くしたらそれで全然OKやったと思いますね」

「けどそれではまるで芭蕉を伊賀市のPRに利用してるみたいな感じですけど」

「芭蕉というビッグネームを伊賀市のPRに利用するというのは恥ずべきことでもありません」

「そんなもんですか」

「ろくに芭蕉のことも知らんくせに十年に一度バショーサンガーバショーサンガーゆうてわいて出てくる害虫のみなさんは横に置いてですな」

「害虫のみなさんとかゆうたらあかんがな」

「ちゃんとした知識と見識にもとづいてしっかり考えた企画によるPRをばんばん展開したらええんです」

「ご町内イベントではどうしようもありませんか」

「ですからさつぽろ雪まつりに参加できなかったのはちよつと残念なことでしたな」

「参加してたらどうなりました」

「それは参加してみないとわかりませんけどそこそこ図にあたってた可能性もゼロではないですから」

「図にあたってたらその先はどんな展開ですか」

「芭蕉が全国各地の各種イベント会場をたどりながら伊賀市をPRすることになったたかもしれません」

「芭蕉さんがさつぽろ雪まつりをスタート地点にして現代版『おくのほそ道』の旅に出るわけですか」

「そうなたら伊賀には帰ってくれないでしょうね」

「なんで芭蕉さん帰ってくれませんねん」

「そろもうスタートが雪まつりだけにゆきはあつても帰りはありません」

「大喜利やってるんやないてゆうてますがな」

乱歩生誕六十年七十年八十年

「いっぽうこちら名張市の話題でございますけど」

「なかなか忙しい漫才です」

「じつは江戸川乱歩が生まれたのも西暦の下一桁が四になる年でして」

「偶然にも芭蕉といっしょですか」

「つまり今年は乱歩生誕百二十年の年なんです」

「いわゆる大還暦ですね」

「しかも名張市が市制施行六十周年」

「人間でゆうたら還暦を迎えました」

「町村合併によって人口三万人の名張市が誕生したのは一九五四年のことです」

「これまた偶然にも西暦の下一桁が四になります」

「ですから乱歩が六十歳の還暦を迎えた年に名張市が発足したということになるわけです」

「偶然とはいえ今年はかなり意義深い年です」

「おめでたいことがいろいろ重なってる年にこんな漫才やってええのかという気もいたしますけど」

「ほなやめたらどないですか」

「でも僕らの漫才には名張市民の負託にこたえる責務があるんですからやめるにやめられません」

「誰ひとり負託なんかしてくれてませんやろ」

「それで六十年前の話ですけどそのころの名張市には乱歩がどうこうゆうてる余裕はありませんでした」

「生誕地碑が建立されたはずですけど」

「たしかに名張市発足の翌年に生誕地碑が除幕されたんですけどあれはあくまでも市民レベルの話です」「行政とは関係なしに一般市民がお金を出し合って乱歩の生誕地碑をつくりましたと」

「町村合併で旧町村が赤字を持ち寄りましたから名張市の財政は無茶苦茶なことになってたんです」

「名張市の歴史は赤字で始まったんですか」

「発足二年後の五六年にはとうとう財政再建団体に転落してしまいました」

「ほんまに乱歩どころではなかったんですね」

「そのうえ五九年に君またえらいことが」

「なにがありません」

「伊勢湾台風の直撃で大変な被害を受けました」

「泣きつ面に蜂ですがな」

「それでも六一年には財政再建が終了いたしました」

「先人のみなさんががんばってくれました」

「そのあとまた西暦の下一桁が四になる年が巡ってきたわけです」

「市制十周年の一九六四年ですね」

「一九六四年の名張市では大きな動きがありました」

「ちょうど半世紀前ゆうことになりますけど」

「一般的には東京オリンピックが開催されたことで記憶されてる年です」

「なるほどそういう年でしたか」

「東京オリンピックには日本の復興を国際的にアピールするプロジェクトという一面もありまして」

「敗戦による痛手から立派に立ち直りましたと」

「開会式直前には東海道新幹線も開通しましたしね」

「日本の技術力の高さが世界に発信されました」

「ですからオリンピックの参加選手も必死でした」

「国の威信を背負ってましたから」

「いまでこそスポーツの指導で体罰はいけなとかいろいろいわれるようになりましたけど」

「当時はなにがなんでも金メダルゆうことで信じられないほど厳しい指導もあったみたいです」

「とくに有名だったのが女子バレーボール」

「監督は鬼と呼ばれた大松博文さんでした」

「鬼のようになさけ容赦のない指導がつづきました」

「でも女子選手はみんなそれに耐えたんですね」

「ですから東洋のマゾとかいわれてまして」

「それは東洋の魔女ですね」

「日本が東京オリンピックを成功させたことで経済大国になると宣言した年にここ名張市におきましては」

「どんな動きがあったんですね」

「近鉄大阪線の桔梗が丘駅が開業いたしました」

「それほど大きな動きでもないと思いますけど」

「これから大阪のベッドタウンになりますと名張市が高らかに宣言したわけですから」

「そういう意味では大きいかもわかりません」

「発足当初の名張市は田園観光都市というのをキャッチフレーズにしましてね」

「そんなあったんですね」

「田んぼや畑があるから田園で」

「赤目滝と香落溪があるから観光ですか」

「そのままやないかゆう話なんですけど」

「でもとくになんにもない土地ですから」

「なんにもないところですから一九五四年に市になったあとも人口がじわじわ減りつづけてまして」

「赤字やわ人口は減るわではさっぱりわやですがな」

「そんななんにもない土地にもじつはあったんです」

「なにがありましたん」

「なんにもない土地があったんです」

「君いったいなにをゆうてますねん」

「つまり名張市には大型住宅地として造成できるなんにもない土地がたくさんあったわけなんです」

「大阪のベッドタウンになる可能性が眠っていたと」

「大きなポイントは近鉄大阪線でした」

「近鉄一本で大阪まで一時間で行けますから」

「ですからまず近鉄が桔梗が丘住宅地の開発に着手して桔梗が丘駅を開設いたしました」

「そのあとにも新しい住宅地がどんどん生まれました」

「名張市は完全に大阪の通勤圏に入りましてね」

「新しい市民も増えてきました」

「はつきりゆうたら名張市はなんにも考えてなかったんです」

「といいますと」

「田園です観光ですゆうてるあいだに大手デベロッパが勝手に目をつけてくれたわけですから」

「名張市のなんにもない土地に住宅地としての価値があることを発見してくれました」

「ですから名張市はなんにも考える必要がなくてただもうどうでも好きにしてくださいと」

「もうどうにでも好きにしてくださいと」

「ぼーっとしたまま半世紀」

「ぼーっとしたままではあきませんかな」

「けどほんとにぼーっとしてるだけで新しいまちができて人口が増えていったんです」

「それなりに必要な施策や事業はあったのところがいますか」

「もちろん新しい住宅地が誕生したら学校とか公民館とかいろいろつくらなあきません」

「いわゆるインフラの整備ですね」

「ハード面以外に新旧市民の関係を良好なものにせなあかんという課題も浮上してきました」

「大阪方面から新しい住宅地に引っ越してきた市民と以前から住んでる市民がいかにして親しくなるかと」

「ですから乱歩生誕八十年の一九七四年」

「なにがありました」

「新旧市民の融和を合言葉にした名張夏祭りが初めて開催されました」

「市民総踊りゆうやつですか」

「せやてせやてほんまやてとか思わず赤面してしまうような囃子が夏の夜空にやかましくこだましまして」

「新旧市民がひとつになったわけですが」

「そんなようなことでしたから生誕八十年ゆうても誰ひとりとして乱歩のことは思い出しませんでした」

「乱歩はぼったらかしでしたか」

乱歩生誕九十年

「名張市の快進撃はさらにつづきました」

「たしかに急成長しましたね」

「人口も一九七九年には四万人を超え八三年には五万人を突破し」

「それでまた西暦の下一桁が四になる一九八四年が市制三十周年で乱歩生誕九十年の年でしたけど」

「名張市は乱歩のことなんかどこ吹く風で一九八七年には六万人を超え九〇年には七万人を突破し」

「どこまで行きますねん」

「名張市制四十周年にして乱歩生誕百年にあたる一九九四年にはついに人口八万人台に突入いたしました」

「八万人台はええんですけど乱歩生誕百年でなにか記念事業はあったんですか」

「このときは全国的な乱歩ブームが起きてましてね」

「そうなんですか」

「たとえば出版界では乱歩を特集した雑誌があいついで発行されました」

「どんな雑誌ですか」

「『話の特集』『ガロ』『シナリオ』『キネマ旬報』『創元推理』『太陽』『幻想文学』『国文学解釈と鑑賞』」

「一年のあいだに八つの雑誌で乱歩特集ですか」

「乱歩生誕百年と松竹創業百周年を記念した『RAM PO』という映画も薫りんたろう監督バージョンと奥山和由監督バージョンの二作品が公開されました」

「本木雅弘さんが明智小五郎を演じた映画ですね」

「もちろん乱歩関連の本もたくさん刊行されました」

「なにしろブームですから」

「本のタイトルだけ列挙しますと『乱歩』『ふたりの乱歩』『江戸川乱歩アルバム』『江戸川乱歩の大推理』

『江戸川乱歩99の謎』『回想の江戸川乱歩』『少年探偵団読本』などなど」

「一年でそれだけ出たんですか」

「ほかに乱歩作品の文庫本も八冊ほど出版されてとにかく大変な乱歩ブームやったんです」

「そしたらやっぱり名張市でも」

「さすがに記念事業がいろいろありました」

「当然そうなるでしょうね」

「名張市がちょうどそうゆう時期に来てたゆうこともありましたから」

「そうゆう時期でどうゆう時期ですもん」

「快進撃がつづいたからこらでそろそろかっこつきたいなみたいなの」

「なんでかっこつけないあきませんねん」

「人口増で成長したあととはやっぱり地方都市としてのグレードアップゆうことに目が行きますから」

「三万人都市が八万人都市になってそれなりのグレードを求めるようになったわけですか」

「昔のままの田園と観光に大規模住宅地をつけ加えただけの田舎まちではかつこがつかんやないかと」

「グレードの高さを広く知らしめたいと」

「経済的に余裕ができたらしめてもそっちのほうに走ってしまいがちです」

「余裕がないときは大衆食堂ばかりやけど余裕ができたら食事もグレードアップして高級レストランへ行くようになるみたいなことですか」

「ずっと吉野家名張店やったけどそろそろグレードあげてスシロー名張店へ行こやないかとか」

「それではグレードに変化がないと思いますけど」

「さようなら和食さと上野白鳳店」

「グレードあげてどこ行きますねん」

「こんにちは和食さと伊賀上野店」

「それおなじチェーン店の系列ですから」

「そうかと思うときは元祖伊賀肉金谷の前をばあーっと素通りしたるやないかとかですね」

「君のグレードいっこもアップしてませんかな」

「グレードをアップするうえで手っ取り早いのは高級ブランドを所有することなんですけど」

「いわゆるステータスシンボルですか」

「名張市もそうゆうのが欲しい時期を迎えました」

「誰にもわかる高級ブランドを身につけて」

「グレードの高い地方自治体になりたいなと」

「それで名張市はどうしました」

「地元ゆかりの高級ブランドを必死に探しました」

「なんぞええのがありましたか」

「なんとふたつもあつたんです」

「いったいなにがありましたん」

「観阿弥と乱歩です」

「たしかにどちらも名張市に関係があつて全国的に通用する名前です」

「名張市はこのふたつのコンテンツをグレードアップに役立てようとしたんですけど」

「なにか問題でもありましたか」

「そんな芸当が名張市役所のみなさんのおつむで可能かどうかゆうことになりますと」

「君またそんなことゆうてますけど」

「なんべん死んでも不可能でしょう」

「べつに死ぬ必要はありませんかな」

「手前どもはなにも考えさせていただかないことにさせていた দিয়ে おります」

「そのせりふ去年の漫才にも出てきてましたね」

「手前どもはできるだけ働かさせていただかないようにさせていた দিয়ে おります」

「それがお役所の決まりゆうことでしたけど」

「せやから無理はいわんといたってほしいんです」

「なにが無理ですもん」

「観阿弥と乱歩で名張市をグレードアップせよとかそんなこといわれてもとても無理なんです」

「けどいろいろやってたんとちがいますか」

「観阿弥関連では一九九一年に名張薪能が始まりました」

「観阿弥ゆかりの地にふさわしいイベントですがな」

「ただし名張市はみるうちに財政難で二〇〇七年からは予算が安い屋内開催となっております」

「名張薪能ではなくなって名張夏能ゆうことです」

「乱歩関連では同じく九一年にミステリー講演会が始まりまして日本推理作家協会から派遣していただいた作家先生の講演が毎年の恒例になりました」

「いまをときめく人気作家の先生がたに名張市までおいでいただきました」

「要するにこうした場合のグレードアップはたいいてい成金趣味に陥ってしまうわけなんですな」

「成金趣味ゆうことはありませんがな」

「とりあえずお金を出してそこらでやってることの真似しといったらOKやないかと」

「そういえば薪能では名張市より先に旧上野市が上野城薪能を始めてましたし講演会なんかそれこそどこでもやってることですけど」

「なにも考えずできるだけ働かないみなさんが自治体のグレードアップを図るとなると自分の腹の痛まない税金で成金趣味に突っ走るしかないんです」

「成金趣味で高級ブランドを買うわけですか」

「当時の名張市はお金だけはあったみたいでして」

「でもそうやって観阿弥と乱歩による名張市のグレードアップが始まったわけですから」

「その三年後が一九九四年でした」

「乱歩生誕百年の年になりました」

「その記念事業ゆうのが君えらいもんで」

「どないしました」

「名張市が実施した乱歩生誕百年記念事業のことをいまや名張市民の誰ひとりとしておぼえてないんです」
「そんなあほな」

乱歩生誕百年

「乱歩生誕百年の年に名張市がいったいどんな記念事業を展開したのか」

「誰もおぼえてないゆう話ですけど」

「たとえ名張市民は忘れていてもちゃんと記憶にとどめてくださってる乱歩ファンもありましてね」

「そんな奇特なかがいらっしやるんですか」

「去年の二月のことでしたけど」

「どないしました」

「その乱歩ファンのかたが僕のブログのコメント欄に書き込みをしてくれたんです」

「どんなご用件でした」

「名張市の乱歩生誕百二十年記念事業に期待しています」

「名張市にエールを送っていただいたんですか」

「そのかたは乱歩生誕百年記念事業のひとつにも遠路はるばる参加してくださったそうでした」

「それで生誕百年記念事業のこともちろんとおぼえてくれてたわけですか」

「名張市の二十年前の記念事業がどんなんやったかいうこともコメントとして書き込んでくださいました」

「ほんまに奇特なかたですな」

「四件の記念事業についてお書きいただいてありましていまでも僕のブログで読めるようになってるんですけどここで紹介してみたいと思います」

「記憶に残った記念事業ベスト4ゆうわけですね」

「まず最初は『①ミステリートーク「江戸川乱歩の人物像」↓山村正夫氏の講演』」

「九一年に始まったミステリー講演会の流れですか」

「九四年は第四回目となりまして日本推理作家協会から山村正夫先生がおいでくださいました」

「乱歩の人物像についてどうおっしゃってました」

「いやじつは僕その日はちよつとした事情があつて山村先生の講演を拝聴できなかったんです」

「それではあきませんがな」

「つづきましては『②乱歩賞作家・石井敏弘氏の書き下ろし小説「北斗七星の迷宮」を出題とするミステリーウォーク。参加者約800人で、犯人と殺人動機の正解者には、漏れなく名探偵認定証をくれました。また、正解者のなかから抽選で、名張のお土産セットが贈られ、日本最北（と言っても福島ですが）から参加した私もいただきました。小説の解答編を演劇で上演したのも画期的でした』」

「参加者八百人ゆうのはすごいですね」

「僕そのミステリーウォークに行きませんでしたからすごかったかどうかはよくわからないんです」

「なかなか面白そうな企画やと思いますけど」

「乱歩賞作家の石井敏弘さんは全国各地でこうゆうことを手がけていらっしやいまして」

「名張市の企画ではなかったんですか」

「たとえば平城京遷都千三百年の二〇一〇年には石井さん奈良でおんなじようなことやってはりました」

「名張市は石井さんの企画をかうただけなんですか」

「ですから名張市には成金趣味でありものをかう程度のことしかできないゆうてますがな」

「ほかの記念事業もそうなんですか」

「みつつめは『③白石加代子氏の「百物語」シリーズの一環として、「押絵と旅する男」「人間椅子」が上演されました』ゆうことでして」

「それもやっぱりあります」

「東京の岩波ホールで初演したあと全国で上演されているのが白石加代子さんの『百物語』シリーズです」

「それを名張市がかうてきたゆうことですか」

「しかもこれはたぶん名張市の直接買いつけではなかったと思うんです」

「そんな君デパートのバイヤーやないんですから」

「たしか旧上野市民のかたから持ち込まれた企画やっような記憶があります」

「旧上野市民のかたといいますと」

「白石さんの事務所かなにかの関係者のかたとその旧上野市民のかたとがお友だちかなにかやったかと」

「なにかばっかりですがな」

「なにしろもう二十年も前の話ですから」

「とにかく白石さんのシリーズから乱歩作品を選んで記念事業として上演してもらったわけですね」

「そうゆうことしかできないみたいでして」

「独自企画はなかったんですか」

「いただいたコメントのラストが『④名張市立図書館の「大乱歩展」が開催されました。↓「貼雑年譜」の実物を初めて、観ました。中さん演出の「盲獣」の演劇は、観れなかったのは、残念でしたが』となっております」

「名張市立図書館の大乱歩展はさすがにオリジナルの企画やったんでしょうね」

「じつは僕その大乱歩展に行ってませんので」

「君そなんばっかりなんです」

「昔から出不精でございまして」

「そうゆう問題やないと思いますけど」

「あんまり気が進まなかったんでしょね」

「けど君お芝居を演出したそうですね」

「その件はコメントを寄せてくださったかたの誤解なんです」

「そしたら君はなにをしたんですか」

「ちよっとした講演をしたんですけどしゃべってばかりゆうのも疲れるやろなと考えまして」

「講演するだけではそれほど疲れませんやろ」

「座・名張少女という劇団をやった女の子数人に頼んで『盲獣』とか『人でなしの恋』とか講演の途中で乱歩作品を朗読してもらいました」

「完全な手抜きですがな」

「ギャラはもちろん僕がひとり占めしましたけど」

「よけいあきませんかな」

「それでその日の午前中が僕の講演で午後になってから山村正夫先生の講演会が催されたんですね」

「山村先生の講演会は事情があって行けなかったゆうて君さつきゆうてましたけど」

「もちろん拝聴するつもりではいたんですけど」

「どんな事情がありましたん」

「日が悪かったんですね」

「どうゆうことですか」

「その年のプロ野球セリーグは巨人対中日の最終戦で勝ったほうが優勝という劇的な展開になりました」

「いきなり話題が変わってるんですね」

「巨人の長嶋茂雄監督がいみじくも国民的行事と呼んだ最終決戦を制したのは巨人のほうでした」

「知りませんがそんなこと」

「つづく日本シリーズは巨人と西武の一騎打ち」

「それがどうしたんですか」

「当時は西武の黄金時代で日本シリーズの巨人戦でも負け知らず。九〇年なんか四戦四勝の圧勝でした」

「いわゆる四タテですか」

「ですから九四年の日本シリーズは巨人にとって雪辱を期した戦いになったんです」

「山村先生の講演会はどないしました」

「その巨人対西武の日本シリーズ第一戦がちょうど山村先生の講演会の日にぶつかりまして」

「講演会は昼間のうちに終わってしましますがな」

「あいにくと当時の日本シリーズはデーゲーム」

「そしたら君」

「うちに帰って第一戦をテレビ観戦してるあいだに山村先生の講演が始まって終わってしまったんです」

「君いったいなにをしとったんですか」

乱歩生誕百十年百二十年

「そんなこんなであほなことばかりゆうてるあいだにまたしても十年が経過しました」

「乱歩生誕百十年の二〇〇四年を迎えましたか」

「いまやすっかり忘れられてますけど二〇〇四年には芭蕉さんは行かずにたくさんのあほさんが行った官民合同事業『生誕三六〇年芭蕉さんがゆく秘蔵のくに伊賀の蔵びらき』が開催されました」

「その話題はもうええのとちがいますか」

「あの事業にはじつは乱歩関連イベントもいくつか組み込まれていたんです」

「どんなイベントでした」

「演劇とか展示会とかそうゆうのでしたけど」

「そしたらそれが実質的に乱歩生誕百十年の記念事業やったゆうことですか」

「そのはずなんですけどあの伊賀の蔵びらき事業はろくに芭蕉のことも知らんくせに十年に一度バショースンガーバショースンガーゆうて鳴きながらわいて出る害虫のみなさんでおなじみの芭蕉生誕三百六十年がメインでしたから乱歩生誕百十年のことはほとんど話題になりませんでしたね」

「害虫とかそういうことゆうの君ほんまにあかんで」

「そんなんいちいち気にする必要はありません」

「関係者から叱られたらどないしますねん」

「バルサンたいったたら静かになります」

「せやから人を虫あつかいするなゆうてますねん」

「虫あつかいに関連してお知らせしておきますとそもそも虫ゆうのは冬のあいだは姿を見せません」

「土のなとかで冬を過ごしますから」

「越冬した虫が地上に出てくることすなわち蟄虫が戸を啓くことを略して啓蟄と申します」

「毎年テレビの天気予報で紹介されますけど」

「暦のうえの二十四節気のひとつですから」

「氣候が暖かくなってそろそろ虫も顔を出してくるころのことですね」

「だいたい三月六日前後が啓蟄で」

「立春から一か月ほどたつたころです」

「話の流れとしては今年が乱歩生誕百二十年の年であるということではあるんですけど」

「さつきから話題がころころ変わってますねん」

「つまり話の流れがストップしてるわけなんです」

「どうゆうことですねん」

「なにしろ啓蟄もまだなんですから」

「君いったいなんの話をしてるんですか」

「去年の秋に出た『伊賀百筆』第二十三号では思わぬ不覚を取ってしまいました」

「不覚だらけでなにが不覚かようわかりませんけど」
「のんびり構えてるあいだに第二十三号の締切が来てしまっただんです」

「せやからそのつづきをいまやってるわけですがな」

「今年はそうゆう失態をくり返してはならないと」

「当然そうあるべきでしょうね」

「年明けとともに第二十四号用の漫才を始めました」

「なかなか殊勝な心がけです」

「それできょうはまだ二月九日の日曜日なんです」

「それがどうしました」

「立春は過ぎたものの春は名のみ風の寒さよ」

「まだまだ春は遠い感じです」

「名張のまちではきのうがえべっさんでしてね」

「鍛冶町にある蛭子神社の八日えびすでした」

「残念なことに雪にたたられました」

「朝から雪が積もってたうえにみぞれが降って寒い一日になりました」

「人出も少なくてもう名張のまちはえべっさんにも見放されてしもたでともつぱらの評判です」

「たまたま天気が悪かっただけですな」

「つまりまだ二月上旬ですから乱歩生誕百二十年記念事業の話題がなにひとつないんです」

「お役所の年度ではまだ二〇一三年度ですし」

「いっぽうで一年も前から乱歩生誕百二十年記念事業に期待してくれてるかたもあるんですけど」

「乱歩ファンのかたからエールをいただいています」

「実際にはいまのところ記念事業なんか影もかたちもない状態です」

「どないしますねん」

「かといってこのままずるずる記念事業を待ってたらまた締切に間に合わなくなる可能性が出てきます」

「それはなんとか避けたいですね」

「ですから窮余の一策」

「また妙な手に出るわけですか」

「これから乱歩生誕百二十年でがんばってくれそうな名張市民にスポーツをあてたいと思います」

「そんな市民がいらっしゃるんですか」

「名張市では去年の十月に乱歩生誕百二十年を視野に入れた乱歩生誕祭ゆうのがありました」

「いわゆるプレイベントですね」

「その流れで今年もなにかあるはずなんです」

「その人たちが記念事業をやってくれるわけですか」

「昨年十月二十一日付の朝日新聞ウェブニュース『怪人二十面相も祝う』から引用しますと『名張市生まれの推理作家、江戸川乱歩（1894～1965）の誕生日前日の20日、初めての「乱歩生誕祭」が、近鉄名張駅東口で開かれ、怪人二十面相のパフォーマンスや合唱で祝った。／市民らでつくる実行委員会（小島敏孝世話人）が来年の生誕120周年を前に乱歩生誕の地を市内外にPRしようと企画した。／雨の中、黒マント、シルクハット姿で怪人二十面相に扮した会社員上田豊太さん（43）Ⅱ桔梗が丘4番町Ⅱが、オリジナル曲に乗って、駅前に立つ乱歩像の前に登場。『乱歩先生は50歳を過ぎて名張の人たちと交流し、心の古里となった。名張との絆を思い、さらなる発展をお手伝いしたい』と口上を述べた』ゆうよなこととして」

「当日はあいにくの雨でしたか」
「名張のまちはいまやいろいろなところから見放されてしまてるともっぱらの評判で」

「たまたま天気が悪かっただけやゆうてますがな」
「つづきまして今年一月一日付の毎日新聞ウェブニュース『江戸川乱歩…生誕120年 “大還暦” 祝おう（その2止）／三重』となります」

「乱歩生誕百二十年の年頭を飾った記事ですか」

「記事の一部を引用いたしますと『江戸川乱歩の愛好家でつくる「乱歩蔵びらきの会」は今年で結成10年を迎える。作品の魅力を発信する同会の代表、的場敏訓さん（55）Ⅱ名張市百合が丘東3Ⅱは「地域を活性化させるには、若者をいかに元気にさせるか。若者を共感させる物を、その地域がどれだけ持っているかに懸かっている」と強調する。名張については「素晴らしい文化人を輩出し、乱歩の生まれた地に誇りを持ちたい。今秋の生誕120年は、単なる記念イベントとして、一過性で終わらせたくない」と意気込む』

「乱歩蔵びらきの会の話題ですか」

「その会がじつは芭蕉さんは行かずにたくさんのあほさんが行った官民合同事業『生誕三六〇年芭蕉さんがゆく秘蔵のくに伊賀の蔵びらき』の残党組織であるという事実はこの記事には書かれてないんですけど」

「そんなことわざわざ書く必要ありませんがな」

「とにかくまあ関係各位のみなさんには今年の記念事業をぜひとも成功に導いていただきますよう陰ながらまた心からお願いを申しあげまして」

「乱歩生誕百二十年の話題はそれでよろしいですか」
「この漫才はいよいよここからが本題です」

「いったいどこまで行きますねん」

恐るべし一眼国

「伊賀地域十八万人の善男善女が待ちに待った本題がいよいよ開幕するわけですけど」

「えらい長い前説でしたな」

「去年の『伊賀百筆』第二十三号では誌面を五十四ページほど頂戴いたしましたし」

「今年もしようもないこと口走ってるうちに二十五ページ目に入ってます」

「でもこれはしかたのないことなんです」

「なんでですね」

「本題に入るまでにまず伊賀地域のありのままの姿を理解していただく必要がありますから」

「伊賀のことを理解しなければ本題が理解できないいうわけですか」

「ですから長い長い前説で伊賀地域の真実の姿を具体的にご紹介申しあげました」

「それにしても長過ぎますがな」

「ひとことで説明することも可能ですけどね」

「ひとことでゆうたらどうなります」

「去年の漫才でも僕は伊賀地域の恐るべき実態を端的に指摘しておいたんですけど」

「まったく記憶にないんですけど」

「伊賀地域の人間はとにかくもの考えない」

「それが恐るべき実態ですか」

「しかただ単にこれらの人はもの考えないんですと観念的に説明するだけでは真実は伝えられません」

「真実と決めつけたらあきませんがな」

「真実を伝えるためにはぜひとも具体例を示す必要があったわけです」

「そのひとつが伊賀の蔵びらき事業ですか」

「官民双方のなにも考えないみなさんが血税三億円をきれいにどぶに捨ててくれたんですと」

「そしたら震災がれきの受け入れ問題も」

「三重県内で伊賀地域だけがなにも考えることなく県のゆうままにがれき処理を進めようとしたんですと」

「そこまで丁寧の説明せんでもええと思えますけど」

「でも『伊賀百筆』は伊賀地域以外のかたにもお読みいただいてるわけでした」

「それはありがたいことですな」

「僕が知ってるだけでも去年の第二十三号は東は箱根の関を越え西は関門海峡を渡り」

「九州まで行ってるんですか」

「行つとるばい。行つとるけん。行つとるくさ」

「なんで突然九州弁にならなあきませんねん」

「九州であれ沖縄であれミンダナオ島であれ」

「なんで突然南方に進出せなあきませんねん」

「遠いところの人に伊賀地域の土地柄を知っていただくためにはやっぱり具体例をお示ししませんとね」

「土地柄ゆうこともないと思いますけど」

「いやこれは土地柄なんです」

「ものを考えないのが土地柄ですか」

「土地柄以外のなにものでもありません」

「そしたら前説で伊賀の土地柄を理解していただいたあと本題ではいったいなにを訴えるゆうんですか」

「じつはさっきもお願いしたことでした」

「さっきていつですんねん」

「八ページほど前の18ページですけど」

「どんなお願いでした」

「無理はいわんといたってほしいんです」

「それだいたい誰にお願いしてますねん」

「全国の乱歩関係者のかたがたとでも申しますか」

「乱歩関係者のみなさんがなんぞ無理なことでもゆうてはりますのか」

「一般的にはまったく無理ではないんですけどここ伊賀地域におきましては無理難題もええとこでして」

「どうも理解に苦しみますけど」

「『一眼国』ゆう落語がありましてね」

「その落語が無理難題に関係あるんですか」

「目がひとつだけの人間の国があるゆう話でして」

「ちよつと毛色の変った落語みたいですね」

「目のふたつある人間がその国に迷い込んだらつかまえられるて見世物にされてしまいます」

「またえらい変ったのがいるやないかと」

「つまり目の数でゆうと一眼国の人間とわれわれとは普通という言葉の意味が逆転してるんですね」

「一眼国で普通ゆうたら目がひとつ。われわれの世界で普通ゆうたら目がふたつ」

「ですからたとえば頭がふたつある子供がいた場合」

「なんちゆうたとえを出してきますねん」

「その子にとっては頭がふたつゆうのが普通ですから身近な人間に『あの人や、およねさんは、どうして顔が一つしかないの』とか質問したりするわけです」

「なんちゆう怖いこと質問しますねん」

「乱歩の『孤島の鬼』という小説にそうゆうシーンが出てくるんですけど」

「質問された人はなんと答えたんですか」

「『アハハハ知らねえよ』」

「笑いごとやないと思いますけど」

「あはははは知らんがな」